プチジャン神父

「信徒発見」に立ち会った宣教師

プチジャン神父

フランス人のローマ・カトリック教徒、ベルナール・タデー・プチジャン (1829-1884)は、オータンの神学校で学び、そこで短い間教授として働いたのち、布教活動に参加し、上司からの命令を受け日本へと向かいました。彼は、まず始めに琉球諸島(現在の沖縄)に住み、日本語の勉強をしました。この時代、キリスト教は、日本人には未だに信仰が禁じられていましたが、外国人には17世紀以来初めて、日本で隠さずに信仰を行うことが許され初めていました。プチジャンは1862年に横浜に移り、その翌年、大浦天主堂の建設に携わるため長崎に移りました。1865年に天主堂が完成した数週間後、彼は話で聞いていた、浦上の村から来た隠れキリシタンの末裔に出会うという、喜ばしい驚きに巡り会いました。

長崎の布教活動において、プチジャンは最も重要なメンバーの一員となりました。彼はこの地域に多くの教育施設や協会を設立し、それらの多くは、自分たちで数世紀に渡って信仰を守り続けてきた隠れキリシタン達の再教育に使われました。この再教育や、キリスト教の更なる布教を行うにおいて、印刷の重要性を理解したプチジャンは、この技術に精通した宣教師を探し求めました。このため、彼はド・ロ神父を1868年に日本に呼びました。ベルナール・プチジャンは、1884年に亡くなり、大浦天主堂に埋葬されました。